

大友氏の日向侵攻とその目的

橋本操 六

はじめに

天正六年（一五七八）春秋二回にわたる大友氏の日向出兵については、優位のうちに日向を支配していた伊東氏の敗退と、土持親成一族の壊滅、および宗麟自らの秋の出陣と大敗が九州の支配圏を大きく塗りかえる発端となった事件として江戸期より注目されている。しかし、『大友家文書録』⁽¹⁾綱文をはじめ、『大友興廢記』⁽²⁾「両豊記」⁽²⁾「大友記」⁽²⁾「豊筑乱記」⁽²⁾「西治録」⁽²⁾等大友側の立場に立っての内容は極めて雑であり、しかも高城合戦と耳川合戦を混同した記述内容になっているものもあるなど、あまり参考にはならない。

反面、島津方の史料『旧記雜録』⁽³⁾は、その内容が極めて豊富で、しかも時間単位に当時の状況を把握しうること、宣教師の報告の事実を裏付けることなど、貴重なものである。

この日向をめぐる大友・島津の研究は、大友氏崩壊の根幹をなすものであるにもかかわらず非常に少ないのが実情である。概説書は別にして、木村忠夫氏の「耳川合戦と大友政権」⁽⁴⁾、渡辺澄夫氏の「大友宗麟とキリスト教的理想国―社寺破却との関係―」⁽⁵⁾と、『大分県地方史』一二四号を通じて唯一の「天正六年高城戦における南郡衆の動向」⁽⁶⁾が大塚主氏によって発表されているだけといっても過言ではない。

このことは、大事件であるにもかかわらず、事件の場所が大友・島津両氏の本国以外であること、また、事件の場所日向か

らみれば、対決の当事者は国外の者であることなどが、研究対象として取りあげられない原因をなしているのではなからうか。

木村氏は、大友氏の日向敗戦の結果、大友氏の年寄制度が崩壊していく過程を明らかにしたものであり、渡辺氏は日向出兵の目的は「キリスト教的理想国」の建設にあったと、宗麟の信仰面からの問題提記である。

本項では『旧記雑録』を利用して大友方の動向・作戦等を明らかにし、侵攻の目的が奈辺にあったのかについて述べてみたい。

注(1) 『大分県史料』33 『大友家文書録』三。

(2) 『大分県郷土史料集成』戦記篇(一)(二)所収。

(3) 『鹿児島県史料』「旧記雑録後編一」。

(4) 『譜代藩の研究』「譜代内藤藩の藩政と藩領」所収 明治大学内藤家文書研究会編 昭和四十七年 八木書店。

(5) 『増訂豊後大友氏の研究』所収 昭和五十七年 第一法規出版株式会社。

(6) 『大分県地方史』一一六号所収。

一 春期出陣の名分

天正六年の日向侵攻について、大友家の正史ともいえるべき『大友家文書録』宗麟譜は、島津氏が伊東氏を撃ち、その地を併合したこと、縣を本拠地として宗麟の麾下に入り、質子を大友家に出していた土持親成が、大友家に反し島津氏に応じたことに対し、激怒した宗麟が出陣に踏み切ったという。

伊東氏の敗北と豊後流寓は天正五年十二月～翌一月のことであるが、宗麟は六年正月嫡子義統に土持親成征服を命じた。義統の府内上原館発足は三月十五日、日向侵入は四月と『大友家文書録』には記録されている。日向侵入の目的は四月十日の土

持氏抛城松尾城陥落をもつて一応の完了とし、佐伯宗天・木付宗虎らを城番として松尾城に残して凱旋し、春の日向侵攻の終止符としている。

『大友家文書録』にみえる日向侵攻の名分については冒頭にみたとおりであるが、江戸期の野史や島津方史料、あるいは宣教師たちはどのように述べているかをみよう。

「大友興廢記」は、「土持親成逆心を功み宗麟公聞召し、急度御馬を出され、土持を御退治成さるべきとの御詔なり」と、親成逆心を出兵の名分としている。「大友記」は、日向を追われた伊東三位入道が、宗麟の武徳を以て再び本國を領知したいと希望し、その条件として日向半國の献上を申し出た。不便に思った宗麟が「伊藤入道のため日州へ発向」する陣觸れをしたという。このほか「西治録」「両豊記」があるが、「大友興廢記」「大友記」とほぼ同内容の記述となっている。

島津方史料によつてみると、「庄内平治記」⁽¹⁾には、「義鎮ノ代ニ至リテ、筑後・筑前・肥後・肥前・豊後・豊前六ヶ國總テ押領セシカハ、大隅・日向・薩摩之外ハ草木モ靡クトソ聞ヘシ、剩日向ヲモ打取ント、内々胸ヲ焦スノ折節、日州ノ伊東敗亡シテ豊後ノ方ヘ落迷、大友父子ヲ頼ケレハ、幸是ニ事ヲ寄テ、日州ヲ侵シ取ラント心中ニ笑ヲ含テ、先伊東義祐ニ野津三百町ヲ扶助シテ、時節ヲゾト窺ケル云々」と、従前から日向を狙っていたが、伊東の敗亡がそのきっかけを作ったとするだけしか見当たらない。

以上の諸記録と異なり、キリシタンとの關係で述べるのが「勝部兵右衛門聞書」⁽²⁾である。

(省略) 府内を住城ニシテ、六ヶ國の大名小名相集リ、何事も心ニ不任といふ事なし、物の盛衰、時の旺廢有浮世の習なれハ家の傾廢もや来りけん、榮花余りなる処に、南蛮の黒船流揚して府内に到着す、異流曼と云和尚来り、其方便説法異他、其上天笠震旦の珍物(中略)を持運て進せられハ、宗麟是に心を写され、改禪宗、鬼里下宗と成給、國中輩大凡此宗ニ不成者なし、普代の賢臣ハ是ヲ苦痛て退けハ、鬼里下時嬖者ハ驕リ奢て國政を専とすれハ(中略)、斯ル処にイルマン同國の船薩摩の坊津に着津ス、其船を如豊後可被出之由懇望せらると、昔より異國の着船ハ、於其津商売と云へり、或又天下の命ならハ不

及是非義也とて、是を不被許容、南蛮人憤り訴え、俄に宗麟薩摩入を思ひ立る(中略)、先日向を御知行有て、其後鬼も角も御計ひ給へと被申けれハ、散位入道も日向ハ吾普代相伝の国にて候へハ、君臣の好ミ未忘、大友家の大勢引具して我等罷下ると申さハ、年来の者共定て蜂起申へし、日向の嶋津勢難忍覚候とイハレケレハ、宗麟モ義宗も可有左事也と同意し給へハ日向入ニを定りける

と、キリシタン、南蛮貿易、伊東義祐の豊後敗亡の三者を一括述べて、日向侵攻の原因としている。

大友氏の南蛮貿易と、貿易船を島津氏が繋留したことを示す史料に、天正元年八月廿五日付けで島津氏重臣あてに出した加判衆連署書状がある。⁽³⁾ 概要は、南蛮向けに出航させた貿易船が帰朝するに際し、島津領中に繋留したところ、大風で破損した旨の連絡があった。津島重臣方に照会したが返事がないので心配している。島津・大友両家は代々意を通じている間柄で、いささかの隔心があっても他国の嘲笑を受けることになるので、速かに分別されたい。貿易船は宗麟より派遣されたことは南蛮国も十分承知して丁重な扱いをしている。したがって大國大友家に対し遺漏ないよう取り計ってほしい、というものである。連署者は田原親賢・臼杵鑑速・志賀親教・佐伯惟教の四名。宛先は伊集院忠棟ら六名の重臣である。なお、この照会は臼杵鑑速が伊集院忠棟に照会したが返事が遅延しているので、加判衆が協議し、連署状として発給したものであると追申されている。

宣教師カリオンは、大友義統が妻と共にカトリック教を学び始めたと述べたあと、「また、彼はそれ以前に父と共に日向の國を攻め取ろうと計画を練っておりました。これには彼らにとって大義名分がありました。即ちその國をその國の眞の所有者たる王のものに戻そうというのです。何故なら薩摩の王がこれを押領したからであります。(中略)、さて父子は共に謀って、この國が攻め落とせた場合には、これを老王の支配下にとどめることとしました。更にまた彼らは、老王自身が軍勢をひきいて日向にむかうこと、またその軍力は約四万人と決めました」と、日向國回復を大義名分としたと明確に記している。⁽⁴⁾

フロイスは『日本史』⁽⁵⁾ 第三十七章で伊東氏の敗北と豊後への避難に触れたあと、「豊後(國主)の嫡子は、(薩摩國主の日向)制圧

と侮辱を己れに對するものと受けとめ、薩摩勢が奪った(日向)國を武力で奪還しようとして、直ちに準備を固めた」と、同様に伊東氏との關係を大義名分としている。

以上示した大義名分のほか、『史料綜覽』も、宗麟が伊東義祐の部將米良四郎右衛門等を援けて、日向の恢復を図らせたのだとしている。

注(1) 『旧記雜錄後編一』九四五号。

(2) 右同 一〇六〇号。

(3) 右同 六八五号。

(4) 『大分県史料』(4)「切支丹史料之一」。

(5) 松田毅一・川崎桃太訳 豊後篇Ⅱ 昭和五十七年 中央公論社。

二 春期攻略の概要

『大友家文書録』は、天正六年正月宗麟が土持親成征伐の指揮を義統に命じたという。それは、六年正月に肥後國甲斐右衛門大夫や二月に衛藤統門に、日向出陣の準備に万全を期すよう伝えていたこと、二月一日の豊後一宮由原宮への勝軍祈禱、二月八日の速見郡間別調などによっても裏付けられる。

「日州江御発足日々記」によると、伊東氏敗北直後の天正五年十二月二十四日、佐伯宗天は日知屋・塩見・門川三城に、大友方として堅固な守備をする才覚があれば、豊後より援軍を派遣する用意がある旨を通知したが、三か城の城主らは、封も切らず、使僧兩三人に都於郡城の義久のもとに持参させたという。

同日記天正六年正月四日条には、土持親成あて佐伯宗天書状及び宗麟・義統書状約十通が島津義久奉行衆まで持参されたと

し、その内容は、「日州之錯乱、無是非、就其伊東三位入道父子孫之身軀腹をもきらせられ候之歟、又如何被成行候哉、無心元由」という趣旨であるという。二月十一日付け土持親成あて吉岡鑑興書状は「親成が養子相模守を島津方に派遣し談合した由を、実に心もとなく思っている。相模守も帰国したとのことであるので、親類衆を添えて出頭させ、薩摩の状況を逐一報告せよ。日向国は大友が下知を加えるので、もし薩州衆が攻略するようなことがあれば、則時応戦、忠節を励み、大友にその心底をみせるべきである。このような状況下では巷説も珍らしくないので、敵の術中にはまらないよう、よくよく思索し、たとどのような邪説をいわれようとも、忠儀の心懸が土持氏長久の基である。好みを通ずる間柄であるので遠慮なく申し述べよ」という内容である。

同日付けで佐伯宗天も、⁽⁷⁾「日州錯乱の儀について親成の真意を知るため、佐伯掃部助を派遣したところである。したがって、日向表の状況が早かに報告されるであらうと思っていたにもかかわらず、まだ報告がないのはどうしたことか。また養子相模守を島津方へ派遣した旨を耳にし、実に心もとなく存じている。相模守が帰国したとのことであるので、親類衆と共に豊後に出頭し、薩摩の状況を報告せよ。日向国は先年京都より御判国として認められたので、大友が下知を加えることになっている。もし薩摩衆が合戦をしかければ、真先に懸け合い、忠儀を抽んで、親成の無二の心底を頭わすさである。これが土持家長久の基である。好みの間柄であるので遠慮なく申し述べる。なお、掃部助は二三日以前帰ってくると思っていたが、まだ滞留しているのは如何したことか。請文はわざわざ使者をもって言上しているのに、掃部助鑑述を帰さないのは、宗天に対し含むところがあるのか」と伝えている。

以上のように、吉岡鑑興・佐伯宗天二人が土持親成の心底を探る書状を与えているが、とりわけ親成の離反をとがめる内容のものでもなく、ただ、薩摩の詳細な情報を得たいと希望している内容といえる。しかし、真意は日向征服であることは間違いない。

「日向記」の六年二月十二日条によれば、⁽⁸⁾日知屋・塩見・門川の城主は、宗麟が出陣を企てれば、六か国の諸勢を三城で引

き受け、日・薩・隅の案内をする旨を佐伯宗天に申し入れ、宗天もそのまま義統に披露したとある。義統は二月十二日、門川城主米良四郎右衛門・塩見城主右松四郎右衛門・山陰城主米良喜内に

就其境行、最前以来無二ノ覚悟、寔ニ感悦候、今度ノ調議於任存分者、城督并本領ノ義者不申、依忠貞ノ浅深、知行等望次
 第可申談ノ条、当弥以堅固ノ才覚、可被遂本意衷肝要候、恐惶謹言、⁹⁾

と、忠貞を励む由を賞し、本領安堵及び恩賞を約している。さらに、評議終了後、門川への先手また船手等の警固を定め、先手の大將には白杵相右衛門・吉水新助・柴田治右衛門、船手大將には深柄・若林、そのほか豊後に飯萬の日向武士伊東新助・伊東弾正入道休徹・伊東下総權守・舍弟常薩守・同參河守・長倉勘解由左衛門・伊東近江守・舍弟長倉六郎太郎・佐土原撰津守・福永宮内少輔・宮田讃岐守・稲津八郎そのほか一門の者が門川城に入ったという。二月二十一日のことである。¹⁰⁾

この海陸からの進攻は、十二月は方々から島津方に注進され、諸境目の用心のほか、高城・財部・穂北各城には番衆が配置されている。二月二十日、豊後兵船十五六艘が門川浦に入った。日知屋・塩見・門川は再び大友方となったのである。この状況に対応して島津方は二十三日三城に使僧を派遣するが、美々津表に豊後衆が入っているので連絡しがたい旨が伝えられている。同夜、耳川の渡まで足輕を偵察に出し、近日中に豊後勢が攻略をはじめの旨の情報を得ている。¹¹⁾

大友方が、土持親成はもちろん、日知屋・塩見・門川の各城主に対して工作をするのは当然としても、さらに島津内部への工作のあとが見える。つまり、三月五日島津義弘が伊地知勘解由左衛門尉に島津義虎よりの書状三通を届けているが、その内の二通は大友義統よりの書状で、一通は豊後老中よりのものである、内容は薩摩・大隅・日向へ取り懸ってほしい、その時は特別な配慮をしたいというものである。¹²⁾

三月二日、佐伯宗天は被官葉師寺主水助に九日の宇目表集結を告げ、十一日には日向発足は十三日の旨を告げている。¹³⁾大友義統は三月九日に日向進発祈願を由原宮に行ない、¹⁴⁾十五日に府内上原館を發足、¹⁵⁾日向に入ったのは四月になってからである。¹⁶⁾大友大友対島津の小競合は、三月十九日の高千穂三田井氏の土持氏被官甲斐讃岐・同大和・同伊勢宅所攻撃が最初で、二十五

日には三名を降伏させたことで宗麟・義統から感状が与えられている。⁽¹⁷⁾また、同二十五日河野宮内丞には、土持親成逆心に際し、順儀の覚悟で佐伯表まで退いたことをほめ、好みの者共を内略をもって降伏させるよう才覚を命じている。⁽¹⁸⁾河野氏は土持氏の同族であろうか。

「義統譜」⁽¹⁹⁾によると、義統は実弟親家・佐伯宗天・惟実父子・田原紹忍ら重臣のほか、日田・玖珠・宇佐郡の諸士三万余を率い、本陣を豊後と日向境の宇目酒利に置き、兵を七隊に分けて日向に進入させたのである。先鋒の佐伯宗天は屋峰口より、志賀親成は梓口から進入したことにより、山毛・田代の士も降り、四月十日には親成父子の籠もる松尾城を陥落させた。義統は宗天・木付宗虎らを松尾城番として留め、本隊は豊後に凱旋したという。

二月二十一日、大友勢の先手・船手ならびに豊後に仮寓していた伊東氏家臣が門川城に入ったことは前に述べた。⁽²⁰⁾この中に見せる長倉勘解由左衛門(尉)は、三月三日残兵数百名を集め、辺地石之城に入って対島津行動を取るようになる。⁽²¹⁾このような状況の三月十六日、島津義久は都於郡を發ち、十八日には鹿児島に帰還してしまった。⁽²²⁾これを持っていたかのように、日知屋・塩見・門川の三城は縣城の土持親成を攻めた。親成は急を都於郡に告げるが義久帰国後で救援は得られず、四月十日、前述のように松尾城で破れたのである。

注(1) 「増補訂正編年大友史料」二四、一・二号。

(2) 右同 三号。

(3) 右同 五号。

(4) 「旧記雑録後編二」九四八号。

(5) 右同 一〇四一号。

(6) 右同 九六二号。

(7) 右同 九六三号。

- (8) 右同 一〇四三号。
- (9) (8)に同じ。
- (10) (8)に同じ。
- (11) 右同 一〇四一号「日州御発足日々記」。
- (12) (11)に同じ。
- (13) 『増補訂正編年大友史料』二四、一〇・一六号。
- (14) 右同 一四号。
- (15) 右同 二三号。
- (16) 右同 三七号。
- (17) 右同 二六号。
- (18) 右同 二八号。
- (19) 『大分県史料』33『大友家文書録』三。
- (20) 「旧記雑録後編一」九五二・九七三・九九〇・一〇四〇号。
- (21) 右同 九五二号。
- (22) (21)に同じ。

三 石城拳兵と高城合戦前夜

「後編旧記雑録卷十」の「国史^{卷十}貫明公松齡公」三月三日の条に、「伊東氏臣長倉勘解由左衛門収散卒、得数百人、據日州石城」と記録しているし、⁽¹⁾「島津義久譜」は、天正六年春殘党百人を収め、日州辺地石之城に據り、主君伊東義祐の憤りを晴

らそうとしたと述べたあと、この行為を「精衛の海を鎮んとするに似たり、然といへども一榻の内に他人の鼾睡を容か如し」と表現している。⁽²⁾

長倉祐政の石城入城は、日向記に「門川表ニテ睨ト評議ヲ調、山浦方々ニ手賦シ玉フ、山陰・田代・三方・坪屋・日知尾・水志・谷入・下神門・⁽³⁾三方其外豊後一味ノ同意故、新納石城ニ長倉勘解由左衛門ヲ先トシテ、当家ノ貴族衆并年比衆山田二郎三郎敦多楯籠ル」とあるように、日向北部沿岸諸氏が大夫方に一味したことを、長倉の石城入城の原因となしている。これに対応して島津方は、「例ノカラクリ」と表現される工作兵を侵入させ、石城籠城兵の減少を誘発させ、七月六日島津忠長・伊集院忠棟を大将に、数千の騎歩をもって攻撃を開始した。⁽⁴⁾

石城は高城前を流れる小丸川上流にあり、石城前面は石を転がす程の水勢の大河で、渡河は舟か筏によるしかないという立地条件のもとにあった。したがって、攻撃に当たっては甲冑のまま河を渡らねばならず、流水のため全員首まで濡れる有様であった。渡河した島津軍は、門を破り、垣を越えて攻め入り、数十人を討ち取った。島津方の死者はわずか三五人であった。この攻防で大将忠長が左臂に箭傷を負ったこと及び石城の守りが固いことから、全軍は佐土原に引きあげた。⁽⁵⁾

石城側の勝利と、大友軍の第二回目の日向進攻について木上宗閑は、八月一日付けで相良義陽に次のように伝えている。⁽⁶⁾

「山裏の者共は順儀に背き島津方になった。上下親子兄弟の好みといわず、このような分別は沙汰の限りではない。連絡があったように石之城を島津勢が攻めたが、城衆の勝利に終わった。とりわけ長倉祐政・井尻伊賀守・八代越前守・長友弥八郎の軍忠は著しく、義統より特別の御感を得ている。それにつれても出陣が急がれているが、大軍であるので、先衆として山下・狭間・田北九郎・吉弘大蔵少輔が今明日中に日知屋に着陣する予定である。これら先衆の役目は石之城を守るためのもので田代・坪屋城に籠もらせる由である」。

島津義久は再度石城攻略を始めることとし、島津征久を大将に、伊集院忠棟・平田光宗・上井寛兼を副将に命じ、自身は九月十一日鹿兒島を発し日向へ向かった。十三日野尻の市来美作守の所に入った義久は、翌十四日には鹿兒島よりの供を二手に

わけ、石城に二番替で派遣することにしてゐる。十四日酉刻征久らは石城攻めに出發、十七日には忠棟の發案で大木を伐り、それを河底に沈めて大きな浮橋を作つて渡河に成功し、數重にわたつて城を包圍し、諸軍は晝夜わかたず鉄炮を撃ちかけた。(7)

「日向記」は「同日(九月十五日)ニ石城へハ島津ヨリ着陣責戦、城中ヨリモ粉骨ヲツクシ雖防戦、山中ノ城郭粮無テ夜日ノ合戦ニ味方手ハ負ツ、見次キノ勢ナケレハ、稲津孫八郎・福永宮内少輔彼兩人度々鎗ヲ合、原口山ニテ名譽ノ戦死ヲ遂ニケル、山田土佐守・宮田太郎次郎・長倉勘解由左衛門分捕高名無比類、睨ト城ヲ相抱ケレトモ、豊後ノ軍法滯ル故、無是非シテ同廿九日、石城ヲ捨也」と二十九日の石城落城を伝えている。「島津義久譜」は城中の食糧・飲料水が絶えたことにより、長倉祐政が和を請うたとあり、島津方諸將も籠城兵が餓死するのを見るに忍びず、囲みを解き、酒食を与えて豊後に送つたとある。(9)「島津征久譜」は九月三十日の長倉降伏、豊後に退去と簡単に述べている。(10)

次に宗麟の日向進攻と島津側の動向について眺めてみたい。

「北郷時久譜」によると、宗麟・義統が豊肥筑前後六州數万の甲兵で日州攻めを企ててゐるを聞き、北郷時久は義久に誓状を呈し、義久もまた七月二十日時久に起請文を与え、永代同懷たるべきを誓つてゐる。(11)八月三日には北郷彈正忠忠虎に同様起請文を呈してゐる。(12)

天正六年九月四日、宗麟はかなりの軍勢と幾門かの大炮を携えて臼杵を出發した。その乗船には赤い十字架を描き白緞子の金の縁飾りを施した四角い旗を掲げたという。主隊は陸路日向に向つたのであるが、耳川を渡つた旨が山東凌の米良備前守より九月二十六日野尻の義久のもとに伝えられ、翌二十七日には豊後衆が少々耳川を渡つたが、やがて引きあげた旨が財部の川上三河守よりもたらされた。十月一日にも豊後勢少々が耳川を渡つた旨が報告され、二十三日には三納城地下人が悪心を抱き、平野城を焼き落とす、八代・綾・本庄城籠をはじめ裏里にも悉く放火してゐるが、翌二十四日には都於郡城まで攻の寄せた。よくこれを防いだ島津軍は、三納城地下人らを川原田道場光大寺に追い詰め、五百余を討ち捕つた。(14)

大友軍は十月二十五日高城近くに陣を構え、四ツあいの垣を結いまわした。このため内端の往来も容易にできなくなつた。(15)

この日、一旦鹿兒島に帰国していた義久が日向にむけて出陣した。二十六日未明、宮内を発ち霧島山の難所を越え、高原の上原長門守館に入り、二十七日から十一月二日までは紙屋の稲留新介のもとで過ごし、二日出立。都於郡・佐土原より数万騎が綾・本庄・六野あたりまで迎えのため参集。同日、伊集院忠棟の館に入った。三日は御一家・国衆・一所衆・地頭の全てが義久のもとに祇候し、終日評定に費された。

十一月六日は、四日の雨に続いて夜半よりにわかの大雨となった。この大雨は島津義久以下諸将はいうに及ばず雑兵までが時期はずれの大雨・洪水と驚いている。また、豊後陣より和睦談合のため高城の島津家久に大友陣に出向くよう、しきりに申入れをしている旨の報告がもたらされている。七日も終日の大雨。八日も終日談合。⁽¹⁶⁾

注(1) 「旧記雑録後編一」九五二号。

(2) 右同 九九三号。

(3) 右同 九九〇号。

(4) 右同 九九〇・九七三・九七五・九七六号。

(5) 右同 九七三・九七六号。

(6) 「増補訂正編年大友史料」二四、九三号。

(7) 「旧記雑録後編一」九七四・九七五・九七六号。

(8) 右同 九九三号。

(9) 右同 九七四号。

(10) 右同 九七五号。

(11) 右同 九八五号。

(12) 右同 九八八号。

(13) 『フロイス日本史』7豊後篇

(14) 「旧記雑録後編一」一〇三九号。

(15) (14)に同じ。

(16) (14)に同じ。

四 高城合戦

大友氏の九州六か国支配を大きく後退させる原因となった高城合戦について、『大友家文書録』は、まず十一月十日に発生した佐伯宗天と島津家久の接戦、家久の財部城退脚、宗天の名貫原進軍を記述する。続いて十一日は佐伯宗天一族及び三重・宇目の豊後勢と塩見・日知也・門川・山毛・田代兵を率いた宗天軍の高城南への進軍、田北一族及び星野・蒲池・田尻・三池・桑野ら筑後・筑前の武士団を率いた田北鎮周軍の城北への進軍、田原紹忍・田原親貫ら本隊の城東への進軍と、佐土原を本営とした島津義久の高城救援のための兵の配置と、双方の敷陣を述べ、続いて大友軍の十一日夜の軍議の状況について述べる。

宗天は、いたずらに攻撃すれば利を失う恐れがあるので、敵の攻撃を待ってこれを撃つのが良策であると主張するが、田北鎮周は先陣を承っていて、強敵を見て戦いを仕かけないのは本意ではなく、明朝先陣仕ると主張し対立した。軍師角隈石宗が鎮周の主張を止めるが鎮周は聞き入れず自陣に引きあげたと、大友軍の内部不統一の状況を明らかにする。

十二日の攻防戦については、まず臼杵・柴田・斎藤らの渡河と戦死を述べ、続いて田北勢が下瀬を渡って川岸の敵を破ったこと、これを見た宗天も止むを得ず上瀬を渡って攻撃を開始したと触れ、以後、大友軍全員の渡河や高城衆及び薩隅軍との合戦で鎮周・宗天以下三千余人が戦死、大友軍の敗走、宗麟の務志賀よりの撤退と、極めて簡単に触れるだけである。

「大友興廢記」も、宗天と鎮周の軍議における意見の対立、諸將の不統一を指摘し、合戦についてもほぼ同様の記述をする

が、最後に、「筑後の蒲池・星野は氣を変じて合戦もせず見合せ引取る」と、筑後勢の離反について触れる。また、「大友家文書録」には見当たらない記述として、大沼・広き池の存在がみえ、「敵は案内者なる故、豊後勢を池にせり込む様に戦ふ」と述べるが、これは「島津征久譜」に「而走多逃入深淵池弥大溺死」とあることから、単なる沼や池でないことは明らかである。

このほか、高城合戦に触れるのは「西治録」で、「大友記」「両豊記」等は耳川合戦と混同し、内容的にも信用しがたい。以上敗者大友方史資料を概観したが、極めて簡単な記事であることには違いない。したがって、高城合戦の真相を知るには勝者島津方の史資料を十分に検討することが要求されることになる。

島津方史料は、島津家惣領の「島津義久譜」など関係者の譜のほか、「大友御合戦御日帳写」「日州御発足日々記」「日州新納院高城耳川合戦日記 川上左近将監」「耳川合戦日記」などの日記類、あるいは「勝部兵右衛門聞書」「長谷場越前宗純自記」などのほか、「日向記」「庄内平治記」などの野史と、極めて多岐にわたり、全て「旧記雑録」に収められている。したがって、各史料を検討することによって、より忠実に当時の状況を再現し得るし、不明な点も補完し得るのである。

さて、「旧記雑録」所収史資料によって高城を包囲した大友軍の総数をみると、豊肥筑前後六州兵二十余万のうち十万とあるもののほか、数万とも六万とも八万とも見えるように定かでない。「勝部兵右衛門聞書」によると、日向に入ったのは義統の実弟親家・親盛のほか、侍大将武田入道紹哲(田北紹鉄)・毛利鎮範・田原紹仁(紹忍)ら豊後勢のほか、蒲池・田尻・秋月・高橋・星野・西牟田・長野・城井・時枝・野中・宗像ら八〇名をあげ、合計は七万余騎とする。さらに、日向への侵入に当たっては、「阿津佐を越る者もあり、高崎より能賀を通り船に乗下るもあり、思ひ思ひに攻下ル由聞えしかハ、日向ノ人トハ高城ニ馳集る」と述べている。

「島津義久譜」「島津義弘譜」は、大友軍はまず縣の古墨に集結し、十月二十日は高城を囲み、城近くの民家百有余に火をかけたとある。この時、高城には山田有信以下五百余のほか、「大友家文書録」に十一月十日佐伯宗天に敗れ財部城に退脚し

たとある島津家久軍一千余が入っていたとある。

「庄内平治記」⁽³⁾は、高城を包囲した大友勢は、総陣・野頸・内原・田間・松原の各陣に思い思いに籠もり、翌二十日城外の民家百余を焼き払った。しかし、高城には人がいるとも見えない様子で、城門も開かず、旗も立たず、静まりかえっていた。大友勢は軍列をなして旗を立て、弓矢を連ね、射騎・歩戦に熟した将兵は、高城の小勢をあなどり、秦青の退雲曲を唱え、右軍曲水の盃をかかげる有様であったと、「島津義久譜」「島津義弘譜」と同様の説明をしている。

「勝部兵右衛門聞書」⁽⁴⁾は、十月十九日先陣三万余騎をもって押寄せた大友軍は、総陣・野頸陣・松山陣そのほか「連」^{つゞき}の小陣に入る。二十日高城攻略に取りかかり、外垣外垂を引き破り、下拵を焼き払い、本丸ばかりを残すまでに攻めた。この緒戦で大友軍も疲れて引く。高城も外拵も破られたので三ノ城戸を限りに固め、鉄炮数百挺で防備に当たった。午の刻、大友の二陣が攻めかかった。大友軍は鉄炮数千挺で攻撃を仕かけたが、城兵を手負わずまでには至らなかつただけでなく、逆に城に近付ては撃たれ、手負・死者数しれずという有様であった。酉の刻、第三陣が攻めかけたが効果なく、手負いを出すばかりであった。二十二日、川原に進出した大友軍は、二十三日には陣を取り固め、相ノ垣を結び廻し、内端の往来を取り塞いだ、と述べる。

さらに、豊後武士は数年来の平和によって華麗を好み、遊興を楽むことが身についていたため、出陣しても忘れられず、昼夜酒宴に沈酔し、武勇の道を忘れ、鼓太鼓乱舞にて栄花を誇る風情であったとし、続いて、大友軍と高城間での酒肴の交換等を述べたあと、筑後土屋野長門守・川原山執行良観連署の矢文が高城内に射込まれたとし、その矢文を紹介している。それは筑後勢の島津内応の書で、

今度、任豊州催促、不慮ニ罷下候、近年大友之行跡蔑待虐民暴政之到、旁以胸底ニ雖含鬱憤、独叛之力不足、徒ニ待時而已、伝吾等属従二百余人奉憑、万ツ必ハ得時拔忠節者也、誠惶謹言、又ニ自然事のあらん時ハ、笛の音とりを吹申へしと、大友の暴政とそこから脱出できない力不足を訴え、島津の旗下に入りたいと依頼している。合戦をポイコットしたのは高

良山座主・星野・秋月・赤星氏らで、本国に送還されている。⁽⁵⁾

以後、十一月十日までの間の大友軍の行動についての記録は見えないし、高城の動きも同様である。記録の大部分は鹿兒島を發つた島津義久の動きを追っている。ここでは、十一月一日、義久が薩隅の軍衆を率い、義弘が日向真幸の騎兵を率い佐土原に入った時点からを対象としたい。

義久・義弘らは、評定で日時を選び大友軍攻略を談合するが、連日の風雨で数日をいたす⁽⁶⁾に送ったという。そのような状況の中の十日夜、義弘の提案で俾卒歩六百余人を大友陣近くに伏せることになったとあるが、「大友御合戦御日帳写」によると、「通路之仕役行者、往来之懸衆三百程之伏草五百余、田原橋二之草五百余、築地之本詰之草三千程」とあり、「日州御発足日々記」⁽⁸⁾は「通路之仕役行者往来之懸衆二百程、一之伏草五百余田原橋、二之草五百余築之本、請之草三千程」とある。「耳川合戦日記」⁽⁹⁾も「日州御発足日々記」とほぼ同内容である。内容的には「日州御発足日々記」が妥当のように考えられる。

さて、「島津義久譜」「島津義弘譜」は、伏兵をして大友勢三十余人を殺したことにより、大友陣が騒動し、伏兵めがけて雲霞のように攻めかかった。これを伏兵が押しつつんで五百余人を殺し、松山陣に放火して引きあげた。その火煙を見た佐土原・都於郡の軍衆が高城々外まで進軍したとする。

「大友御合戦御日帳写」は、十一日午の刻に往来の衆が大友方に攻めかかった。大友軍はあわてて惣陣松山陣より五〇・百弍百・三百と押し出して来た。ところが、一・二の伏兵は大勢の大友軍に驚き、どう対応すべきかの判断をし兼ねる状況に陥った。結局全伏兵が同時に攻めかけ、大友軍を敗走させ、松山陣の大將分の者多くを討ち取ったあと焼き払い全員高城に入ったとする。

島津方惣大將義久は根白坂を本陣として十二日の決戦の指揮にあたった。十二日早朝、大友軍数万は島津軍の屯する野陣に攻めかけた。緒戦で数百人を殺害した大友軍は、勝に乗じて追撃するが、その時義弘は自ら大友軍の前面に撃って出た。同時に征久・忠武軍は大友軍に横槍を入れた。諸將も踴躍して先を争って大友軍に突きかけた。その地には深淵があった。白兵戦

に及んだ時、人馬は右往左往するだけで、さける所がなかった。大友軍はやむを得ず深淵に入り、無数の者が溺死したし、その場を辛じて脱出したものも次々に討たれ、美々川までの七・八里の間は死者でうずまった、という。

十二日の大友・島津の対決を述べる島津方史料の内容は、上述とほぼ同内容である。この日向侵攻とその敗北についてカリオンは、総指揮者田原親賢の無能と怠慢にあったとし、具体的には、島津軍を甘くみていたこと、自軍の防備に必要な地勢を選んだり、深い策略をめぐらそうとしなかったとしている。島津方については、義久は準備を怠らなかつたとする。具体的には領国薩摩・大隅の滅亡は、高城をめぐる勝敗如何にかかっているのを十分承知し、領国内から全力をあげて徴兵し、子供や不具者を除いては一人残らず軍備に充当したこと。豊後方が気づかぬよう異をしかけ、若干の小競合をくり返しながら、豊後方を山間におびき出したあと、全軍で攻めかけ、追い撃ちをかけ、あるいは高城衆も背面から打って出たと、⁽¹⁰⁾『旧記雑録』と同様の記述になっている。

フロイスも、義久は高城を失えば、日向国を失うのみならず、自らの薩摩国すら失う危険に曝されると判断し、可能な限り最大の迅速さと準備をもって高城を救援することを決意したと述べる。具体的には、国内の全地方から人々の召集を図り、老若男女を問わず、ついには武器を手にし得る者はことごとく、いかなる逃口上も許されず、祖国の自由のために参集するように命じた。大軍を率いた義久は、豊後の山岳からあまり隔っていないある嶮山に設けられた自らの陣営にほどなく到着すると、部下のもっとも機敏で有能な指揮官らに、それぞれ配置した分隊をして敵を攻撃させるよう命じた。それは一五七八年の十二月二日、火曜日のことであった。薩摩勢は、豊後勢を誘い出せるかどうか見ようとして、若干の隘の兵をもって出動し始めた。二回にわたってこうした行動が繰り返されたところ、豊後勢の無秩序はこの上ない有様であったから、彼らはもはや我慢しきれなくなり、味方の優位を信じきって出陣することを欲した。彼らはそれが敵の策略であることに気づくことなく、計画的に逃げるふりをして走る敵を追跡し、ついには自分たちに対して仕掛けられていた罠に陥るに至った、とほぼ同様の内容となっている。

以上、大友・島津・宣教師の史料を比較すると、大友方史料は極めて史料性に乏しく、ほとんど真実を伝えていないことが判明するのに反し、島津方・宣教師方史料はそれぞれを補完しあう共通性を持っており、かなり忠実に真実を伝えているといえよう。

注(1) 「旧記雑録後編一」一〇六一号。

(2) 右同 一〇二〇・一〇二一号。

(3) 右同 一〇四六号。

(4) (1)に同じ。

(5) 右同 一〇五六・一〇六三号。

(6) 右同 一〇一一号。

(7) 右同 一〇三九号。

(8) 右同 一〇四二号。

(9) 右同 一〇五六号。

(10) 『大分県史料』(4) 切支丹史料一。

五 宗麟出陣の意図

土持親成父子の籠もる松尾城を陥れた義統は城番として佐伯宗天・木付宗虎のほか、平林弥兵衛尉らを残した。四月二十四日付け平林弥兵衛尉あて義統感状(写)¹⁾に、「然者彼表為擲、佐伯紀伊入道今程可有在国之由申付候、乍辛勞休庵可為御入国之間、以堅固之覚悟預馳走候者可祝着候」とあることから、宗麟の日向入国は少なくとも三月の出陣時点には確定していたと考えられる。つまり、前項で述べたカリオン年次書簡の「父と子は共に謀って、この国が攻め落とせた場合には、これを老王の

支配下にとどめることとしました」とあることの証明である。

秋の出陣については、五月三日付け渡辺兵庫助・徳丸主馬允・徳丸市郎・中村助兵衛尉あて義統感状に、「然者初秋時分、重々可出勢之条、於其砌者、別而馳走肝要候」とさることから、五月時点には既に決定していたことになる。では、この初秋時分の出陣の決定は何時ごろであるかを考えてみたい。

『大友家文書録』は、宗麟は九月に島津義久を討ち、伊東三位入道照眼のためその旧領を回復しようとした。老臣等の諫止もきかずに十月出陣を決定、兵を両豊・両筑・両肥・日向・伊予に募り、十月下旬臼杵を発ち、日向に入り務志賀に本營を敷いた。宗麟は兵を分けて三稜城・坪屋城を守らせ、十一月には佐伯宗天・田北鎮周を左右の先鋒として諸軍を山田新介の守る高城に向かわせた。また、志賀親教ら南郡衆を肥後經由で日向に入らせることにしたという。

「大友興廢記」は、「我勇力を以て九州を多分退治し、日州表も塩見・日知也・門河此三ヶ城、又、山毛・田代の武士も皆相隨ふと云へども、大隅・薩摩未だ其義なし、此両国を手に入るに於ては九州の主とならん」とし、「西治録」も「我武勇威を以六国は幕下に属し、薩隅日未従はずといへども、日向は半ば今従へる上は、何とぞ隅・薩を攻したがへ、九州を掌に握らんとおもふなり」と、全九州を掌握しようとして出陣したとある。他の「大友記」「豊筑乱記」「両豊記」は、伊東三位入道の没落と、領土回復のための出陣の延長線上の記述にとどまり、二回目の出陣の名分を明確にはしていない。

フロイスの『日本史』は、「土持の領地とその土地柄に関する報告は、国主を大いに喜ばせた。彼はその年、あらためてそこに居住しよう決心し、息子に譲渡した他の諸国がより安泰であることを願ひ、(自らは)妻と(土持で)隠居することにした」と述べる。

カリオンの年次書簡の記事と併せ考えると、宗麟の日向入国計画は春の義統出陣前に既に決定していたこと、四月十日の松尾城落居までの間に日向から持たされた土持の領地とその土地柄に関する情報は宗麟を大いに喜ばせ、改めて日向移住を決心させたこと、さらに出陣に当たってはカリオン年次書簡にみえる「更にまた彼らは、老王自身が軍勢を率いて日向にむかう

こと、またその軍力は約四万人と決めました」とある、既定方針にもとづいて出陣したことになる。

カリオンは宗麟が日向侵攻に当たって、「この時すでに父はキリスト教徒であり、息子は公教要理を受講する者でありました。それ故彼らはそれぞれ自己の観点から、その攻め入る国々にできる限り、キリスト教を広めようと努力する旨申し出たのであります」と、日向の地にキリスト教を弘める努力をする旨を述べる。カブラル等を従えて日向に入った宗麟は、たちまちのうちに敵を粉碎し、全くの短時日のうちにその国の大部分の支配者となり、次に城下に攻め入り、寺や神社に火をつけ、これを破壊し、そして何回となくカブラルに次のように語ったという。すなわち、「この国に是非とも立派なキリスト教国を打たてたい、そしてキリスト教の教えに則って、この国が治められるのを見たい」というのがその内容である。

このカリオンの報告に対し、フロイスの『日本史』は、宗麟が妻と共に土持に隠居することにしたと述べたあと、「そこで彼は(カブラル)師に(次のように)述べた。『予は日向に赴くことに決した。ついでには同居するため豊後から三百名だけ家臣を伴うが、彼らはすべてキリシタンでなくてはならない。そしてそこに新たに築かれる都市は、従来の日本のものとは異なった新しい法律と制度によって統治されねばならず、日向の土地の土地の者が予と予の家臣たちと馴染むためには、(彼らは)皆キリシタンになり、兄弟的な愛と一致(のうち)に生きねばならない。それがため、出発にあたっては、一司祭を同伴したい。(さらに)予が住む城を築く前に、まず教会を造り、(イエズス)会の数名がそこに住むことができるだけの封禄を与えるつもりである。その暁には予自身洗礼を受け、キリシタンとなった上は、デウスの教えに反することなきよう生きる覚悟である」と述べた。

カリオンの年次報告とフロイス『日本史』を対比すると、内容に極めて大きな差があることが判明する。カリオン年次報告では、宗麟受洗後の出来事とし、まず目的の日向にキリスト教を弘めるよう努力するとカブラルに申し出たこと、つぎに土持城下攻略及び社寺破却時に「理想的なキリスト教国」建設を夢みる発言をしているが、『日本史』三七章では、土持の領地の土地柄に関する報告を受けた直後つまり受洗以前に「理想的なキリスト教国」建設をカブラルに告げている点がそれである。

内容の矛盾は『日本史』の章の間でも見える。三七章では、受洗前に「理想的キリスト教国」建設を述べるが、第四〇章では、「日向の国主は三位殿という名で、追放の身であり、自領で持ち得た権利をことごとく(豊後国主の)嫡子に譲っていたが、いかなる方法によっても(日向の)国主に復帰する望みがないので、せめてもの願いとして、自分と孫たちが生計を立てられるよう豊後で若干のものを与えられた」と願った。これにつき(豊後)国主と嫡子は、領国の安全のため、本件を(重視して)全力を尽すことにした。もっとも国主フランシスコの意向はさらに一歩進んだところにあつた。すなわち国の統一と、デウスの御名と栄光を(国内に)弘める点であつた」と、受洗後の宗麟は日向国内にキリスト教を弘める点を述べているに過ぎないのである。

したがって、出陣の当初の意図は日向移住とキリスト教の弘通であつて、日向入国後の土持城下攻略、社寺の破却という異常な雰囲気の中で、興奮気味の宗麟が「理想的キリスト教国」構想を口走つたものと考えられる。フロイスは、その発言をおたかも受洗前から宗麟が持っていた構想であるかのように叙述したと考えるべきであらう。

注(1) 『増補訂正編年大友史料』二四、五四号。

(2) 右同六〇、六二、六三、六四号。

謝過 本誌一二七号で紹介致しました「帆足家文書」のうち、大友義鑑・宗麟・義統・吉統発給文書は、既に調査された芥川先生らにより『戦国文書聚影』として公刊されている旨の指摘を受けました。紹介文中、芥川・福川両氏の学者生命の根幹にかかわる不穏当な部分がありました。

ここに深謝の意を表し、両先生の御海容をお願い申し上げる次第であります。

橋本 操六